JAPANESE TABLEWARE

Catalogue No.
20151-2

やきもの用語集　釉薬　無釉　技法　絵付け　意匠

【織部】

おりべ　釉薬

安土桃山期から江戸初期にかけて、古田織部の指導で創始。織部好みの奇抜で斬新な形や文様の焼物です。表面に酸化銅の釉薬を掛け、色によって青織部、総織部、黒織部、鳴海織部などがあり、歪んだ形の沓茶碗や市松模様、幾何学模様の絵付けなどが特徴です。

【志野】

しの　釉薬

百草土の生地に、天然の白い長石釉を厚く掛けて焼き上げた焼物です。やわらかな乳白色と肌にボツボツ穴があるのが特徴で、釉薬の薄くなったところに、淡い火色が生じることがあり、鉄絵を付けることが多いです。無地志野、鼠志野、絵志野、紅志野などの種類があります。

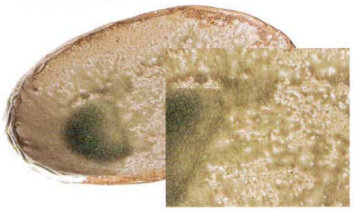
【黄瀬戸】

きせと　釉薬

桃山時代に美濃で焼かれ、長い間、瀬戸の窯で焼かれたものと思われ、この名で呼ばれるようになりました。黄釉を使い、落ち着いた淡黄色が特徴で、装飾として菖蒲、大根などの文様を刻み、胆ぱんという青緑色の斑文でアクセントにしています。

【灰釉】

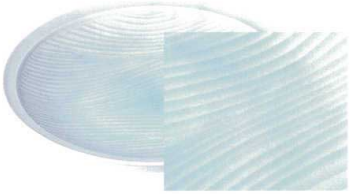
はいゆう（かいゆう）　釉薬



桃山時代から伝わる伝統的な釉薬で、雑木の薪を燃やして残った土灰や、樹木や樹皮などを焼いたあとに残る木灰などの天然の灰を原料にした、基本の釉薬のひとつです。灰が高温で溶けると緑がかった光沢が出るのが特徴です。

【青白磁】

せいはくじ　釉薬



白い生地の上に淡青色の透明な釉薬を掛けたもので、白磁と青磁の中間に位置する焼物です。釉薬の薄いところは白にちかく、厚いところは淡い青で発色し、その濃淡に趣きがあり、透光性がありながら、青白磁には上品な柔らかさと爽やかさが感じられます。

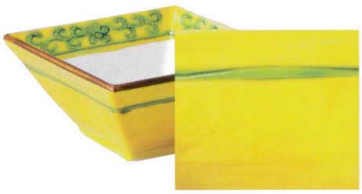
【油滴天目】

ゆてきてんもく　釉薬

黒の釉面に金や銀の斑点が浮かび上がり、この状態があたかも水面に油滴が浮いたように見えるところからこの名で呼ばれています。鎌倉時代の禅僧が中国の天目山で焼かれた茶碗を持ちかえったところから、天目と呼ばれるようになったといわれています。

【交趾】

こうち　釉薬



中国の南部で焼かれた三彩陶で、鉛釉を主に黄、緑、紫などの鮮やかな3色を使った焼物です。色によって黄色のものは黄交趾、緑色は緑交趾、紫色は紫交趾と呼ばれています。一般的によく使われるものは香合、豆皿、猪口などわりと小さいものが中心です。

【窯変】

ようへん　無釉

窯の中で酸化、還元焼成によって、器が灰に埋もれて焼かれた時に偶然に変化した景色を言います。焼成の際に、窯の中で予期せぬ火焔の変化や、灰が降り、思わぬ釉色や釉相が現れます。この窯変は炎と土と薪が燃え尽きて融合した味わい深い景色です。

【南蛮】

なんばん　無釉

中国南方で焼かれ、台湾、タイ、ベトナム、インドなどの南洋方面の炻器を総称しています。色の多くは紫黒色のものから淡紅までいろいろです。無釉で、堅固で、独特の雰囲気があります。